

学会発表への挑戦

家政学部栄養学科 調理科学第一研究室 4年
S.Y. N.C. F.Y. M.S. H.M. S.H.

私たちが所属する調理科学第一研究室では、ソバや大麦を始めとした雑穀類の調理特性および生理機能性と新規利用方法に関する研究や卵の新たな官能評価法構築に向けた研究を通して、社会に貢献できる成果を目指し活動を行ってきた。

今回は2022年9月2日～3日に開催された日本調理科学会2022年度大会に参加した。本学会はハイブリッド形式での開催であったが、私たちはドリームプランで得た奨学金を活用して現地の兵庫へ赴き、対面に参加した。「研究成果を対面で専門の方々に伝えるなかで新たな気づきを得て、自身の専門性を深めること」、「他の研究者の発表を対面で聴講できる場に行くことで、専門知識や発表の仕方等を学ぶこと」を目的として、学会に臨んだ。



口頭発表をして学んだこと (S.Y. N.C.)

学会発表に向けて発表内容の要旨作成、発表用スライドの作成と発表練習の3つを行った。要旨作成では、研究の目的や方法、結果を指定の文字数でわかりやすく書く必要があり難しい作業であったが、先生方のご指導のもと、納得するものを作り上げることができた。

発表用スライドの作成では、一度の発表で聞き手に内容が伝わるように、先生方や研究生の方々に意見をいただきながら、スライドの流れやレイアウト、文字の書体に至るまで注意しながら作った。発表練習では研究生や先生方の前で発表練習をしたことで、様々な意見をいただき、効率的に発表の改善に繋げることができた。また、先生方のご指導のもと質疑応答の対策も行った。予想した質問内容に対する納得できる回答を考えることで、自分の発表をより深く考え、理解することができた。

発表当日は他の発表者や調理科学分野を専門としている先生方が多くいらっしやる中で発表であった。発表練習を何度も重ねてきたが、当日は緊張のあまり、練習のときよりもスピードが速くなってしまい、練習ではできていたことが本番ではできなかったことに悔しい思いをした。改めて練習を重ねることの大切さを実感し、2月の卒論発表会では悔いのない発表ができるよう頑張りたいと思った。また、質疑応答の時間では研究内容についていくつかの質問が上がり、私たちの研究・発表に興味を持って聞いてくださっていたのだと感じた。質疑応答対策として考えていた質問ではなかったが、自分たちがこれまで取り組んできたことを信じて、自信をもって答えることができた。質疑応答から、聞き手の着眼点や同じ分野の専門的知識を学ぶことができ、自身の研究への新たなアプローチの可能性にも気づくことができた。発表を通じて、自分の研究についての発表準備はもちろんのこと、研究の目的やその過程、結果をきちんと理解し、自分の言葉で他者に説明できるようにすることが大切であると学んだ。

学会に参加して学んだこと

1 日目は、「森と海から調理科学へのメッセージー持続可能な食文化を育むために」をテーマとした学術講演会に参加した。講演を聴き、持続可能な社会の実現のために、人々に解決したいトピックについて知ってもらい、自分にできることを考えて行動することが重要だと考えた。調理科学の分野を超えた環境の分野から食環境の現状を学ぶことができ、今後より意味のある研究活動を行う上で、別の学問分野の知識も踏まえた研究が重要になると感じた。

2 日目は、各々の興味を持った口頭発表を聴いた。どの発表も専門性が高く、知識の幅を広げることができた。穀物粉や卵の研究、官能評価など自身の研究と重なる分野の発表を聞いて理解が深まった。全く異なる分野においては初めて聞いた言葉があり、すべてを理解することは難しかったが、発表の仕方やスライド作成のポイントなど様々な知識を吸収することができた。人に納得させる発表をするためには、研究目的と結論を結びつけ、さらに結論から今後の課題を明らかにすることも必要であると学んだ。質疑応答の場面では、実験方法のプロセスやその妥当性についての質問が多くみられた。そのため、研究においてなぜそのテーマを選んだのか、なぜその実験方法で取り組んだのかを自身で理解することが重要

だと思った。また、示されたデータを鵜呑みにするのではなく、そのデータから本当に示された考察にたどり着くのか瞬時に考えることができる会場の先生方をみて、自身ももっと専門性を身につけていきたいと感じた。

発表に対して多くの質問が出ていたことから、学会発表は研究成果の発表の場であり、研究者同士の意見交換の場でもあるのだと感じた。そして、研究に携わる人々は、自分の研究を通じて成し遂げたい未来へのビジョンを鮮明に想定していると実感した。

最後に

今回は口頭発表と聴講という異なる立場から学会活動に取り組んだ。当日の発表はもちろんのこと、研究や準備、聴講を含め学会への取り組みは私たちの成長に繋がった。他者の研究に触れることで、専門性を高めていくことの素晴らしさを実感し、社会問題や自分たちの研究意義を見つめ直すことができた。また、学会発表に至るまでを振り返ると、同期とは助け合いながらも、互いを高め合う存在であると実感した。調理科学会で得た学びを今後の卒論研究に活かし、さらにより成果に繋がりたい。特に、冬に行われる卒論発表会では学んだ成果を存分に発揮できるよう今後とも精進していきたい。

後援会ドリームプラン奨学金を通じて学部生の私たちが学会発表に挑戦するという貴重な機会をいただいたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。